

## 「外国語(英語)コア・カリキュラム」に則した小学校英語指導に向けて

永 倉 由 里

For Elementary School English Instruction in Accordance with  
the Core Curriculum on English Education

Yuri NAGAKURA

2017年9月4日受理

### 抄 録

新学習指導要領の実施に向け、様々な動きが見られるが、特に英語教育においては、いち早く「コア・カリキュラム」が公表されている。平成31年度からの新カリキュラムでは、これに則ったシラバスを作成しそれに基づく授業を展開することになる。「コア・カリキュラム」とその背景にある「新学習指導要領」を入念に読み解き、そこで求められている事柄を、必修となる2科目の中で網羅するのは容易ではない。慎重にシラバスを練り上げたとしても、理想通りに授業が展開するとは想定しにくい懸念材料があるからである。そこで、本稿では、小学校英語指導において特に検討を要する「学生の置かれた状況」と推奨されている「言語の学び方」に着目して議論を展開し、授業改善につなげたい。

キーワード：英語教育、コア・カリキュラム、新学習指導要領、学習者理解、  
第二言語習得

#### 1. はじめに

「小学校教員及び中等高等学校の英語担当教員の英語力・指導力向上に向けた大学の教職課程におけるコア・カリキュラム」が開発・公表された。「小学校教員養成コア・カリキュラム」は、すべての小学校教員養成課程への適用が求められ、小学校教員免許の取得希望者全てが対象となる。2019年度の改正免許法施行開始とともに開講される「外国語の指導法(本学では「英語科教育法」)」と「外国語に関する専門的事項(本学では「英語I」)」においてはコア・カリキュラムに記載されている学習項目のほぼすべての内容を盛り込まなければならない。

そこで、両科目のシラバス作成に先立ち、「小学校教員養成課程 外国語(英語)コア・カリキュラム」並びに「小学校教員養成課程 外国語(英語)コア・カリキュラム 解説」を熟読するとともに、関連する資料・先行研究にあたり、その意図するところを十分

に理解し、具体的な指導の内容と方法について整理・検討することとする。

まず、「外国語の指導法（本学では「英語科教育法」）」のコア・カリキュラムとその根底にある「新学習指導要領」の内容を確認する。次に、小学校外国語教育の変遷を振り返りながら、同科目を受講する学生の諸事情について議論する。そこで浮き彫りになる小学校時代の英語学習経験の乏しさ、彼らが経験してきた英語の学び方と新学習指導要領のもとで望ましいとされる学び方との違いに注目し、他教科の教育法とは異なる留意点があることに触れる。

こうした事情により、コアの1つとして掲げられている「子どもの第二言語習得についての知識とその活動」に関する指導に際しては特に工夫を要する。ここでは、筆者がこれまで取り組んできた第二言語習得理論に基づく授業実践研究（永倉、2006、2007、2008、2013）において拠り所とした「コミュニケーションの4つのレベル」を取り上げ、言語活動の内容と質を判断する尺度として指導に役立つことを述べる。

最後に両科目のシラバス案を示すが、より具体的な指導方法については、「教育研究実践報告誌」他で提案させていただく。

## 2. 小学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム [1] 外国語の指導法

同科目は、「小学校における外国語活動（中学年）・外国語（高学年）の学習・指導・評価に関する基本的な知識・指導技術を身に付ける」ことを、全体目標とし、その【内容】は、次の2つの柱から成る。

1. 授業実践に必要な知識・理解
2. 授業実践

前者の「授業実践に必要な知識・理解」は以下の2つをコアとして提案している。

- (1) 現在の小学校外国語教育についての知識・理解
- (2) 子どもの第二言語習得についての知識とその活用

(1)には、①学習指導要領、②主教材、③小・中・高等学校の連携、④学校・児童の多様性への対応等に関することが含まれる。

(2)については、①言語使用を通じた言語習得、②音声によるインプットの内容を類推し、理解するプロセス、③児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方、④コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて他者に配慮しながら伝え合うこと、⑤受信から発信、音声から文字へと進むプロセス、⑥国語教育との連携によることばの面白さや豊かさへの気づきが含まれる。

後者の【内容】2.「授業実践」は、以下の2つをコアとして提案している。

- (1) 指導技術
- (2) 授業づくり

(1)には、①英語での語りかけ方、②児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方、③文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方が含まれる。

(2)については、①題材の選定、教材研究、②学習到達目標、指導計画（1時間の授業づくり、年間指導計画・単元計画・学習指導案等）、③ALTとのチーム・ティーチングによる指導の在り方、④ICT等の活用の仕方、⑤学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む）が掲げられている。

さらに、【学習形態】にも言及し、①授業観察、②授業体験、③模擬授業を通して目標を達成するよう求めている。

これらを踏まえた「外国語の指導法（本学では「英語科教育法）」のシラバスの作成には、上記の項目についての十分な理解と、それらに基づく具体的な授業実践の内容とその方法の検討が必要となる。そこで、特に議論が必要だと思われる点を取り上げ、要点を整理することにする。なぜなら、半期1コマという限られた時間の中で4つのコア（18項目）を扱うには、学生への情報提供や効率の良い学ばせ方すなわち授業の内容と展開に十分な配慮が必要だからである。

### 3. 新学習指導要領

まず、「総則」と「第10節 外国語」とを並び見てその体系的な構成を確認したい。

「総則」で掲げられた「育成すべき資質・能力の三つの柱」（図1）すなわち

- (1) 知識・技能 ●
- (2) 思考力、判断力、表現力等 ◆
- (3) 学びに向かう力、人間性等 ★

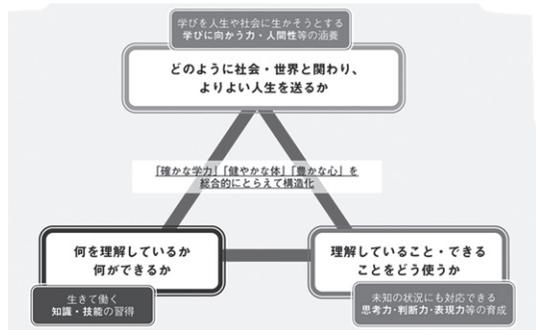


図1 資質・能力の三つの柱（文部科学省、2016）

は、それぞれ「第1目標」の(1)(2)(3)に対応し、「第2各言語の目標及び内容等」の中では聞くこと、読むこと、話すこと [やり取り]、話すこと [発表]、書くことの5領域別の目標ア、イ、ウに対応している（表1参照）。

こうした体系的な記述は、外国語以外の全ての科目において貫かれている（筆者が追記した●◆★参照）。特に外国語は他教科との横断的な学びを含むアクティブ・ラーニングに適しているためこの意味は大きい。

実際の指導計画を立てる際には、それぞれの活動がどの目標（5領域／ア●、イ◆、ウ★）を目指しているかを意識し、第二言語習得のあり方に配慮しなければならない。

また、文末の全てが「～できるようにする」という表現になっており、これらの到達目標について、妥当で実行可能な評価方法を例示しなければならない。

これだけの内容を半期 15 コマで網羅するのは容易ではないが、さらに事を複雑にしているのが、これまでの小学校外国語教育の変遷と受講する学生の諸事情である。

表 1 「外国語活動・外国語の目標」の学校段階別一覧表

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方	
外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること	

目標		
	小学校第 3 学年及び第 4 学年 外国語活動	小学校第 5 学年及び第 6 学年 外国語
	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
（知識・技能） ●	(1)外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。●	(1)外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付くこと、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。●
（思考力・判断力・表現力等）◆	(2)身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。◆	(2)コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。◆
（学びに向かう力・人間性等）★	(3)外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。★	(3)外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。★

5つの領域別の目標		
	小学校第 3 学年及び第 4 学年 外国語活動	小学校第 5 学年及び第 6 学年 外国語
聞くこと	ア ゆっくりはっきりと話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取るようにする。● イ ゆっくりはっきりと話された際に、身近で簡単な事柄に関する基本的な表現の意味が分かるようにする。◆	ア ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。● イ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、具体的な情報を聞き取ることができるようにする。◆

	ウ 文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする。 ★	ウ ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。★
読むこと		ア 活字体で書かれた文字を識別し、その読み方を発音することができるようにする。 ● イ 音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。 ◆
話すこと [やり取り]	ア 基本的な表現を用いて挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、それらに応じたりするようにする。● イ 自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする。◆ ウ サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問をしたり質問に答えたりするようにする。★	ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができるようにする。● イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。◆ ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。★
話すこと [発表]	ア 身の回りの物について、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。● イ 自分のことについて、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。◆ ウ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。★	ア 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。● イ 自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。◆ ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。★
書くこと		ア 大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする。また、語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。● イ 自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。◆

#### 4. 小学校外国語教育の変遷と受講学生の実情

文部科学省が公開した「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」(2017)には、これまでの小学校外国語教育の変遷が簡潔に紹介されている（表2参照）。

表2 小学校外国語教育導入の経過（文部科学省、2017）

	4つのステージ	期間	審議会の答申等
1	研究開発学校での英語教育 〈英語活動〉	平成4(1992) ～13(2001)年	外国語教育の改善に関する調査研究協力者会議 (平成5年)
2	「総合的な学習の時間」の中 での英語教育〈英語活動〉	平成14(2002) ～22(2010)年	『英語が使える日本人』育成のための戦略構想 教育再生実行会議（第3次提言）(平成25年) グローバル化に対応した英語教育改革実施計画 (平成25年)
3	英語教育必修化 〈外国語活動〉	平成23(2011) ～31(2019)年	英語教育の在り方に関する有識者会議提言 (平成26年)
4	英語教育教科化 〈外国語活動・外国語〉	平成32(2020)年～	中教審次期学習指導要領答申（平成28年） 次期学習指導要領告示（平成29年）

文部科学省により外国語教育の導入が本格的に検討され始めたのは1990年代に入ってからで、それ以降の小学校英語教育の経緯は4つのステージに分かれている。

第1ステージは、研究開発学校における「国際理解教育の一環としての英語教育の研究」としてスタートし、カリキュラムも教材もないところから小学校英語教育の在り方を現場が中心になって模索した時代である。

第2ステージは「総合的な学習の時間」の中で、学校の独白の判断により、「国際理解に関する学習の一環として外国語会話等」を実施できるようになった時代である。

第3ステージは、「総合的な学習の時間」における週1時間の外国語活動が5、6年生で必修化された時代である。

第4ステージでは、小学校3、4年生で週1時間、5、6年生では教科として週2時間が約束され、いよいよ教科化へと踏み出す。

しかし、このように客観的に概観を追うだけではなく、受講学生の立場に立って小学校英語教育の変遷を捉える必要がある。

##### 4.1 受講学生の英語学習経験

ここで、「平成26年度英語教育改善のための英語力調査」の報告書（文部科学省、2015）から、受講生の高校時代の英語教育の様子を探ってみよう。これは、全国の国公立の高校3年生約7万人を対象に、4技能型テストを使って英語力を調査したものである。テストスコアをCEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）の4技能のレベル別に対応させた結果、4技能すべてにおいて、7～8割の生徒はA1レベル（中学校卒業段階レベル）であった。平成25年度～平成29年度の「第2期教育振興基本計画（文部科学省、2013）」では、高校卒業段階でその上のレベルであるA2～B1に50%以上の生徒が達することを目指していたが、それをはるかに下回っていた。中でも「書く・話す」においては「無回答および0点」つまり、内容のある発信がほとんどなき

れていない割合が、それぞれ 29.2%と 13.3%であった。

また、ベネッセ教育総合研究所が中1～高3生を対象に行った「中高生の英語学習に関する実態調査(2014)」を見ると、英語授業内の活動のうち、自分の気持ちや考えを英語で「書く・話す」は中2をピークに減少していくことも明らかになった(図2参照)。

もちろん、一部の先進的な学校またはクラス集団などでは、発信型の授業展開も見られるようになってはいるものの、多くは旧態依然とした訳読および受験対応に追われ、「日本語に訳す」「単語や文を覚える」「教師の説明を聞く」「文法問題を解く」ことに多くの時間を費やしていたことが見て取れる。

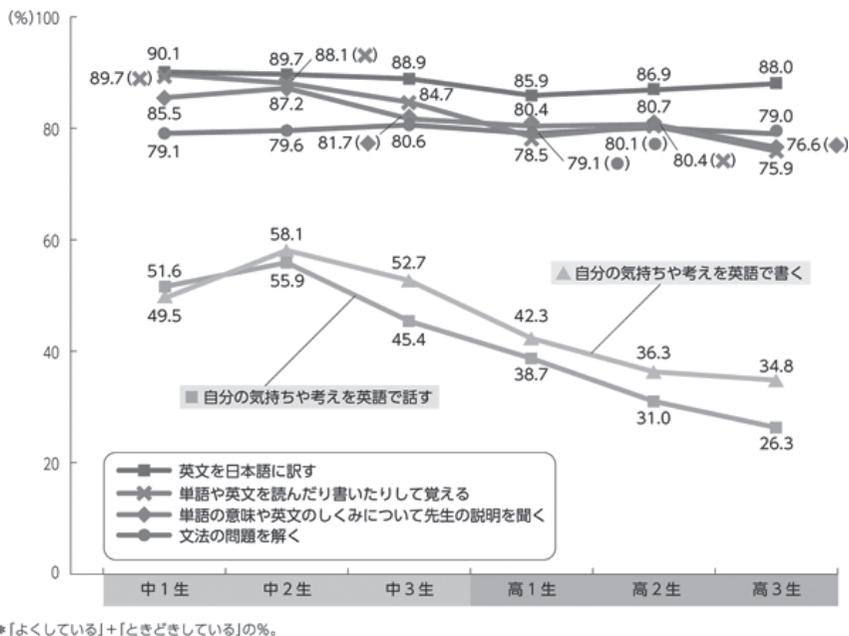


図2：授業でしていること「中高生の英語学習に関する実態調査」(ベネッセ、2014)

このように、我が国の外国語教育は、近隣のアジア諸国と比較しても混迷を極めてきたと言わざるを得ない。30年近くもの間、ある限定された範囲の中での取り組みに終始した結果、改革の恩恵を享受できたのはごく一部の児童・生徒に限られ、一方で様々な方面からの英語教育論、教材の提案、学習法の紹介、あるいは、いわゆるネイティブ信仰などから、公教育の範疇に留まらない混沌状態が続いていると言えよう。

教師を志す学生たちは、自らの学習経験を基に、教師として教壇に立つ姿を描いているものだが、英語については、自身の学習経験を参考にしにくいのが実情である。そこで、彼らがこうした変遷の中でどの時代を通過してきたかを把握させる必要がある。中学・高校時代の英語授業での英語使用状態に関する興味深い先行研究がある。

根岸 (2016) では、「中高生の英語学習に関する実態調査(n=6294名、中学1年生1,057名、中学2年生1,028名、中学3年生996名、高校1年生931名、高校2年生790名、高校3年生1,433名、学年不明59名)」(ベネッセ、2014)のデータを利用し、授業中の英語使用と授業中の活動内容について分析している。

その結果、教師の授業での英語使用率は「ほとんど英語で授業している」という回答は、どの学年も5%前後で、「70%くらい」と「ほとんど英語で授業している」を合わせても、中1～高1では20～25%程度、高2、高3では15%前後である(図3参照)。

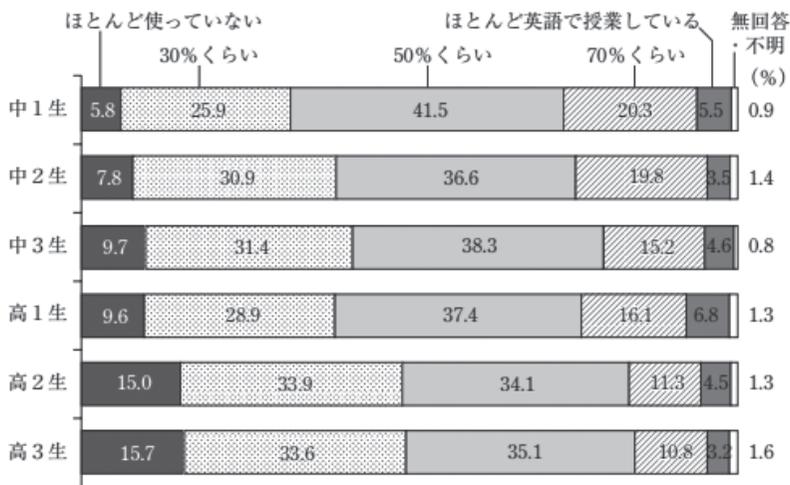


図3 教師の英語使用率「中高生の英語学習に関する実態調査」(ベネッセ、2014)

紙幅の関係でグラフの提示は控えるが、授業中の活動と教師の英語使用率の関係については「単語の意味や英文のしくみについて先生の説明を聞く」「英文を日本語に訳す」「単語や英文を読んだり書いたりして覚える」「文法の問題を解く」という活動は、英語使用率に関係なく行われている。これに対して「自分の気持ちや考えを英語で話す」という活動は、教師の英語使用率が多いほどよく行われている。高等学校では、学年進行とともに実施率が下がる傾向にあり、大学入試との関係について言及されることが多いが、「ほとんど英語で授業している」では、3年間の変化がほとんどない(図4参照)。

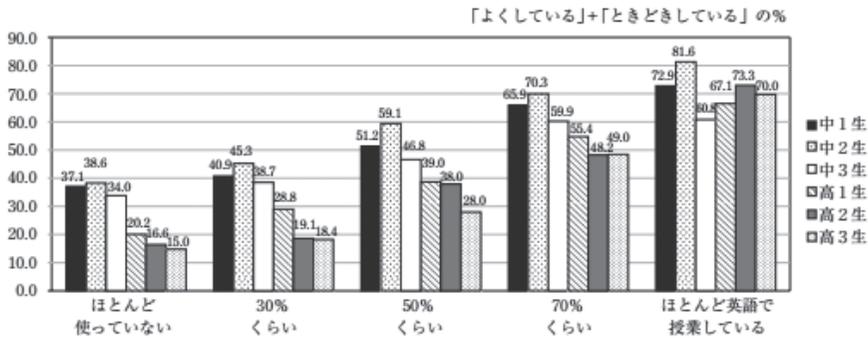


図4 「自分の気持ちや考えを英語で話す」活動と教師の英語使用率（ベネッセ、2014）

次に、学習指導要領と外国語活動の扱い方の変遷を振り返ってみたい。注目したいのは、平成23年度（2011年度）以降、総合学習の時間の中での外国語活動の必修化（図5では現行（太字表記））である。

具体的には、2017年度前期に「小学校英語指導I」を履修した学生は2年生がほとんどで、小学校では、総合学習の時間において学校裁量で実施され、「外国語活動」を経験している可能性がある者たちであった。初回の授業で、履修者78名に尋ねたところ、「毎週英語活動があった」と答えたのはわずか1名で県外出身者であった。全く英語を学んだ記憶はないと答えた者が数名、その他は、年に2、3回ALTがやって来た記憶があるという程度だった。

一方、高校時代は入学時からの3年間は「高校英語授業は英語で行うことを原則とする」とされていたが、その実態を問うと、英語の先生が「今年から英語で授業をしなければならないと困っていた」「ALTがいるコミュニケーションの授業では英語が聞こえていた」中には「（コミュニケーションとは名ばかりで）受験問題集の解説の時間だった」「もっばらノートに和訳を書き取っていた」などという残念な回答もあった。それでも、英語コースなどの恵まれた環境で学び、スピーチやディベートを経験してきた者も2名いた。

彼らより3歳若い現在の高校2年生は全ての公立小学校で全員が5年生から外国語活動を経験している。そして、本学教員養成課程において「英語科教育法」と「英語I」の初の受講者となるのが彼らである。こうした教育改革の波の中でどのような学習経験をしてきたのか、そしてこうした境遇をどう認識し、それらが彼らの情意にどのような影響を及ぼしているかに十分配慮していかなければならないのである。

とは言え、この時には、3、4年生への早期化と5、6年生での教科化という更なる変化に対応しなければならないのである。

		外国語活動を経た生徒が中学生に							外国語活動を経た生徒が高校生に						
ステージ	年度	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	大1	大2	大3	大4
2	2010	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧
3	2011	現行	現行	現行	現行	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧
	2012	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	旧	旧	旧	旧	旧	旧	旧
	2013	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	旧	旧	旧	旧	旧	旧
	2014	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	旧	旧	旧	旧	旧
	2015	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	旧	旧	旧	旧
	2016	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	旧	旧	旧
	2017	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	旧	旧
	2018	前倒	前倒	前倒	前倒	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行	旧
	2019	前倒	前倒	前倒	前倒	前倒	前倒	前倒	現行	現行	現行	現行	現行	現行	現行
4	2020	新	新	新	新	前倒	前倒	前倒	前倒	現行	現行	現行	現行	現行	現行
	2021	新	新	新	新	新	新	新	前倒	前倒	現行	現行	現行	現行	現行
	2022	新	新	新	新	新	新	新	新	前倒	前倒	現行	現行	現行	現行
	2023	新	新	新	新	新	新	新	新	新	前倒	前倒	現行	現行	現行
	2024	新	新	新	新	新	新	新	新	新	新	前倒	前倒	現行	現行
		原則としては英語で授業（高校）							外国語活動を経た生徒が大学生に						

図5 学習指導要領と外国語活動の扱いの推移（筆者が作成）

次章では、小中高連携を考える上でも重要な第二言語習得に関して議論する。

### 5. 第二言語習得に基づく言語活動指導の重要性

コア・カリキュラムの学習内容「授業実践に必要な知識・理解」の2つ目として「子どもの第二言語習得についての知識とその活用」が挙げられている点は評価に値する。

外国語学習の主体である子どもたちがどのように学び、対象言語がどのように学ばれるのかを理解することは、指導の根幹を成すからである。既に述べたように、受講生の多くは第二言語習得に適した学び方をほとんど経験しておらず、小学校の授業中の教師・児童の姿をイメージしにくい。

第二言語習得の分野にこそ、今回の改革の中心をなす部分が多く含まれているわけだが、そもそも第二言語習得理論と言っても、受講生にとっては馴染みの薄いものであり、それらに基づく学習経験も乏しい。したがって、コア・カリキュラムの【学習形態】についての解説の中にあるように「学習者の立場に身を置くことで、学習者の視点から活動や指導法を経験し、それぞれの活動や指導法の長所・短所を体験的に学ぶ」ことが望ましい。

幸い、筆者は、第二言語習得理論に基づく授業実践研究として「ストラテジー・トレーニング」に取り組んできた。中でも、大学生・短大生を対象にした「話せるようになりたい」に応える授業法の探究し続け、より効果的な学習方略を試してもらい、

どのような変容が見られたかを量的データと質的省察を用いて検証してきた（永倉、2006、2007、2008、2013）。それらを通して、各々の学習経験により形成されている学習方略やそこから派生した学習観や情意がいかに影響するのかを思い知らされると同時に、「ストラテジー・トレーニング」を通じて新たな学習方略を導入することが、学習者の自己理解や動機づけにつながり、英語学習者としての自律性を高める効果もあることを確認している。

それでは、小学校教員を目指す学生たちに、どのようなトレーニングを提供すればよいのだろうか。児童がどのように英語を習得するのかを意識しながら、そのトレーニングの効果を自らも認識できるものになりたい。

鈴木（2017）は、「児童がインプットに触れ、やり取りに参加する中で、フィードバックを受け取り、アウトプットする時に、第二言語が習得され、このプロセスを意識することが、指導技術としての英語での語りかけ方や児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方を身につける際の一助となる」としている。

しかし現状ではこうした第二言語習得理論と合致した「音声によるインプットの内容を類推し、理解に至るプロセス」「コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて、他者に配慮しながら伝え合うこと」をかなりの頻度で長期間にわたって経験し、その効果を確認している者はほとんどいないであろう。

このような条件の下で「子どもの第二言語習得についての理論」をどのように紹介するのか、その活用法をどのように体験するのかが、この科目の成否を左右する。

### 5.1 コミュニケーションの4つのレベル

「英語I」の中で、児童役として第二言語習得の理論に則った学習法を体験することでその効果を確認し、「英語科教育法」において指導技術と授業づくりを学んでもらう際には、真正性（authenticity、リアルさ、交わす価値があるか）に着目しなければならない。ここで、これまでの実践研究（永倉、2006、2007、2008、2013）で拠り所としてきた「コミュニケーションの4つのレベル」について述べさせていただく。これは、言語活動における真正性の尺度である。

三浦（2004）は、コミュニケーション活動における「意味」の4つのレベルを以下のように表している（図6参照）。

新学習指導要領で用いられている「やり取り」という文言は、この点を意識させるために新たに採用されたものである。すなわち、場面や文脈に適し、交わす価値があり、「意味」のあるやり取りをしている状態を明確にするための文言である。

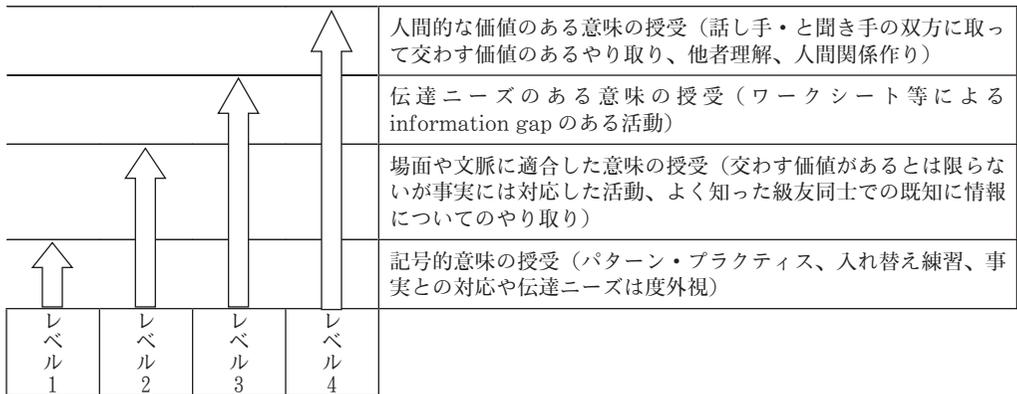


図6 コミュニケーション活動における「意味」の4レベル（三浦、2004）

教室での英語使用と言ってもその「コミュニケーション・レベル」は様々である。最も真正性が高い「真のコミュニケーション（Real Communication）」は、日本語でやり取りするような内容について、生徒同士が英語でやり取りをしている場合（図7-1）と教師と生徒が英語でやり取りをしている場合（図7-2）である。具体的には、季節や学校行事にちなんだ Teacher Talk や自分自身の立場で行う対話である。教師が、自身の考えや感想、経験などを英語で話す場合（図7-3）、児童・生徒が、自分の言いたいことを英語で話すスピーチなど（図7-4）も該当する。

使用できる言語材料が十分でない児童に対して、何の制限もかけずフリーな言語使用を求めるのは難しい。そこで、交わす価値が生じるよう information gap を作ったり、カードを利用するなどして、使用する表現を誘導することがよくある。これらは本物のやり取りの一步手前の活動（レベル3）と言える。



図7-1 レベル4のコミュニケーション

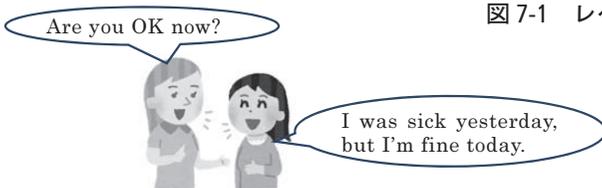


図7-2 レベル4のコミュニケーション

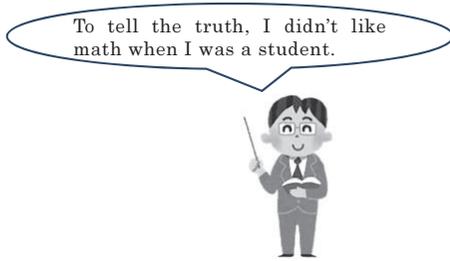


図 7-3 レベル4のコミュニケーション



図 7-4 レベル4のコミュニケーション

それに対し、英語を交わしてはいるものの、そこに新しい情報の提供・入手のない形式的な練習をレベル2、さらに一定のパターンに当てはめる練習や入れ替える練習はレベル1としている。

教師が授業中に英語を発している、リピートさせるための発音の例示や本文の音読しているのはレベル1にも達しない。これらに依って児童・生徒がリピートするのも同様である（図7-5）。

次に、教師が発する英語について考えてみよう。教師が意味のあるインプット（聞くこと）

を提供し、児童は何らかの目的を持って耳を傾け、その場の状況などから様々な推測を巡らし理解に至るのであれば、真のコミュニケーションが成立しているとみなすことができる。

具体的には、授業の初めの挨拶、前時の内容の振り返り、宿題の確認、季節の話題、ニュースなどを取り上げての語りかけなど、Oral Introduction、Ice-breaking、Small Talk と呼ばれるものである。ALTなどの英語母語話者であれば、何の苦労もなく良質なインプットを提供し、第二言語習得に適した状況を生み出せるが、学生たちはこれまで訳読式の授業が一般的だったため、良きモデルとして参考にできる日本人英語教師と出逢っているかも疑問である。しかし、英語母語話者であれば、誰もが理想的なインプットを提供できるかという、必ずしもそうではない。児童たちの表情やジェスチャーを汲み取って、それらに反応するという人間らしいコミュニケーションの場を作り出せるのは、学級担任であればこそできる技なのである。

ところで、Classroom English と呼ばれる英語表現は一覧表の形で提供されることが多い。よく見られる「～しなさい」といった指示表現は、ある程度の使用頻度があれば、比較的短時間で身に付く。しかし、聞き手の反応・表情から、コミュニケーションが成立しているか否かを見取り、「繰り返して言う」「言い方を替えて言う」「ジェスチャーや実物を使う」「伝わっているかを確認する」といった方略を使用できるようになるには時間がかかる。学生たちはそれまでの学習経験から暗記しなければならぬと考えがちであろうが、使用しながら身につけることが、第二言語習得理論にも

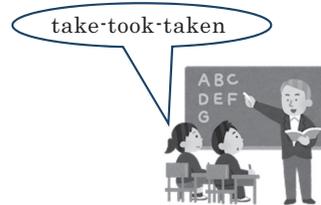


図 7-5 反復練習

沿った賢明な方法であることを意識させたい。

これまで、議論してきた通り、第二言語習得理論に則した学び方・教え方は、従来の授業スタイルとは異なる点が多い。児童役として言語活動を体験している最中に、これまでとは異なる脳の働かせ方や心の在り様に違和感を持つこともあろう。しかし、学生たちは、児童とは比較にならないほどの知識と理解力を持ち合わせているため、第二言語習得に関する理論やそれに基づく学習法についての効果に関する情報を前もって提供することによって、授業の効率を高めることができるであろう。

## 5.2 「コミュニケーションの4つのレベル」を意識した指導計画

該当科目の中で扱うべき主要なものとして、年間計画、単元構成、各時間の指導案といった指導計画の設計とそれらに基づく模擬授業、マイクロ・ティーチングがある。ここでも、前述の学習指導要領のすっきりとした体系的な構成に着目するとともに、「コミュニケーションの4つのレベル」を考え併せることが賢明である。

具体例を上げて検討してみよう。関連の書籍やホームページなどを検索すれば、多くの指導事例を見つけることができる。一般に単元の目的、単元計画、各時間の指導案から成る。『Hi, friends 1/2』に対応した指導案では、学習活動の欄に『Hi, friends』上の Let's Play、Let's Chant、あるいは「○○ゲーム」「○○をしよう」などの活動が並ぶ。数種類の活動を組み合わせて45分の授業案を作成されている。以下は、Web上の複数の指導事例を参考にした『Hi, friends 2』Lesson 6の単元計画である。

表3 『Hi, friends 2』Lesson 6 What time do you get up?の単元計画

第1時	第2時	第3時	第4時	第5時
Let's Play 1 「ナンバーゲーム」	Let's Play 1 「ナンバーゲーム」	Let's Play 1 「ナンバーゲーム」	Let's Chant What time ~?	Let's Chant What time ~?
「ジェスチャーゲーム」 What time is it?	「ジェスチャーゲーム」 get up, watch TV	Let's Chant What time ~?	「チェーンゲーム」 What time ~?	Activity 2 「私の一日紹介」 I get up at ~, 等
Let's Listen 1 「時刻を書き込もう」	「メモリーゲーム」 get up, watch TV	Let's Listen 3 「世界の時刻」It's five o'clock in ~	「インタビュー」 What time ~?	「国際電話ゲーム」 What time is it?
Let's Play 2 「おはじきゲーム」	Let's Listen 2 「さくらの生活時刻」	「ステレオゲーム」 What time ~?	「時差を確認使用」	
Let's Chant What time ~?	Activity 1 「予想+インタビュー」 What time ~?			

ここに、それぞれの活動の「コミュニケーション・レベル」と学習指導要領の5つの領域別の目標を考え合わせると、よりリアルなコミュニケーション（＝やり取り）へと段階的に指導すべきであることがわかりやすく単元構成に示される。

指導者がこの「コミュニケーション・レベル」を意識することにより、第二言語習得に適したプロセスをたどらせることができる。ところが、こうした視点を欠くと、

一見重宝な音源や映像資料に合わせて単語や語句を繰り返すことに終始してしまうことにもなりかねない。

表4 「コミュニケーションの4つのレベル」と学習指導要領の5つの領域別の目標を考  
え併せた『Hi, friends 2』Lesson 6の単元計画

	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時
語彙	Let's Play 1 ● 「ナンバーゲーム」 Let's Play 2 「おはじきゲーム」	Let's Play 1 ● 「ナンバーゲーム」	Let's Play 1 ● 「ナンバーゲーム」		
レベル1	Let's Chant ● What time ~?	Let's Listen 2 「さくらの生活時刻」 聞くこと ア●	Let's Chant ● What time ~? 発表 ア●	Let's Chant ● What time ~? 発表 ア●	Let's Chant ● What time ~? 発表 ア●
レベル1	「ジェスチャーゲーム」 What time is it? ● 話すこと ア●	「メモリーゲーム」 get up, watch TV 聞くこと ア●			
レベル1	Let's Listen 1 ⓂⓈⓈⓈ 「時刻を書き込もう」 What time is it? 聞くこと ア●	「ジェスチャーゲーム」 ● get up, watch TV 話すこと ア●			
レベル2		Activity 1 ⓈⓈⓈ 「予想してインタビュー」 What time ~? やり取り ア●	Let's Listen 3 ⓂⓈ 「世界の時刻を書き込 もう」 It's~o'clock in~ 聞くこと イ◆	「チェーンゲーム」 ⓈⓈⓈ What time ~? やり取り イ◆	
レベル3			「ステレオゲーム」 What time ~? ⓈⓈⓈ やり取り イ◆	「インタビュー」 ⓈⓈⓈ What time ~? やり取り ウ★	Activity 2 「私の一日紹介」 I get up at ~.等 ● 発表 ウ★
レベル3				「時差を確認使用」 ⓈⓈⓈ What time ~? やり取り ウ★	「国際電話ゲーム」 What time is it? ⓈⓈⓈ やり取り ウ★

## 6. まとめと今後の課題

ここまで、学習指導要領の体系的構成と第二言語習得に関連したいくつかの論点について検討したことで、コア・カリキュラムの求めていることがより明確になった。

最後に、平成31年度以降施行される「英語科教育法」と「英語I」のシラバス案を示す（表5、表6）。実際の授業実践においては、これまで述べてきたような学生の実情もあり、言語活動を体験しながら第二言語習得に適した学習法のあり方と意義を伝えるのは容易なことではない。小学校英語の現場で何がどのように展開しているかというコンテクストの不足を補い、児童役として言語活動を体験することにより、彼らにとっては馴染みの薄い英語学習方略の意義と効果を実感してもらい、英語力・指導力の向上につなげなければならないのである。

実際の授業映像は、現場の様子をイメージしてもらおうと貴重な教材となる。学生からの要望も強いので、近隣の先生方とのつながりを模索し協力を求めたい。

そして、授業で扱うあらゆる活動においては、「単元計画・指導案のどんな場面での」「何を目標として」「どのような学習方略を使うことによって」「どんな姿を持って『～できるようになった』と判断するのか」などの一連の流れと狙いを意識させなければならない。特に、言語活動を体験させたり、マイクロ・ティーチングに挑戦させたりする際には、5領域のうちの学習指導要領のどの項目を育成しようとしているのか、「コミュニケーションの4つレベル」のうち、どのレベルに相当する活動なのかなどを意識させたい。

このような事柄に配慮しつつ、下記のシラバスに沿った授業を効率よく展開させるには、まだまだやるべきことがある。文部科学省はあくまで学級担任主導の英語教育の早期化・教科化を推進することを謳い、教員研修用のガイドブックや教材（音声・映像教材を含む）をウェブ上で刻々と紹介している。常にアンテナを高くし、これらの最新情報を授業に反映しなければならない。

また、学生の英語力・指導力の育成には、特に第二言語習得の道筋に配慮して取り組まなければならないが、そのための教材や資料も作り続けていかなければならないだろう。しかも、これまで述べてきた学生の英語学習経験等の諸事情は年ごとに変化していく。授業実践と並行して、コメント・ペーパーやインタビュー、時にはアンケートなどから情報やデータを収集し、それらを学生にもフィードバックし、共に日々の営みを省察し、問題点を検討し、改善策を講じていきたい。こうした授業改善に取り組む一教員としての姿が、学生たちが英語力・指導力の向上に向け、自律的に学び、研修を続けることにつながれば幸いである。

## 参考文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2014). 「中高生の英語学習に関する実態調査 2014」  
<http://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=4356>
- 三浦孝 (2004). 「日本の対人コミュニケーション状況と英語教育の教育的使命」『中部地区英語教育学会紀要』第 33 号 pp.65-72
- 文部科学省 (2013). 「第 2 期教育振興基本計画」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/detail/1336379.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/1336379.htm)
- 文部科学省 (2014). 「中高生の英語学習に関する実態調査」  
[http://berd.benesse.jp/up\\_images/research/Teenagers\\_English\\_learning\\_Survey-2014\\_04.pdf](http://berd.benesse.jp/up_images/research/Teenagers_English_learning_Survey-2014_04.pdf)
- 文部科学省 (2015). 「平成 26 年度 英語教育改善のための英語力調査」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1358258.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1358258.htm)
- 文部科学省 (2016). 「総則」に盛り込まれた資質・能力の三つの柱  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/hpab201601/detail/1376704.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201601/detail/1376704.htm)
- 文部科学省 (2017). 「小学校外国語活動・外国語研究ガイドブック」  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm)
- 永倉由里 (2006). 「言語学習ストラテジー・トレーニングが学習効率、動機づけに与え

- る影響」『中部地区英語教育学会紀要』第36号、39-46。
- 永倉由里 (2007). 「第二言語習得研究を活かした日本人のためのストラテジー・トレーニングの方向性」『中部地区英語教育学会紀要』第37号、151-158
- 永倉由里 (2008). 「第二言語習得研究を活かした日本人のためのストラテジー・トレーニング」『中部地区英語教育学会紀要』第38号、429-436
- 永倉由里 (2013). 「『Learning Journal』から読み取る英語授業が学習者の学習観に与える影響」『中部地区英語教育学会紀要』第42号、235-242.
- 根岸雅史 (2016). 「中高生の英語学習に関する実態調査 2014 から見えてくるもの(1) —英語の指導と学習は授業の英語使用率とどう関係するか—」ARCLE ベネッセ [http://www.arcle.jp/research/books/data/html/data/pdf/vol10\\_3-1.pdf](http://www.arcle.jp/research/books/data/html/data/pdf/vol10_3-1.pdf)
- 鈴木渉 (2017). 「子どもはやり取りを通してことばを学ぶ」『英語教育7月号』pp. 50-51 大修館書店

表5 外国語の指導法（本学では「英語科教育法」）シラバス案

<p>授業のテーマ及び到達目標</p> <p>&lt;テーマ&gt;</p> <p>小学校学習指導要領外国語活動及び外国語科に示された教科の目標、育成を目指す資質・能力を理解し、小学校外国語活動及び外国語科の学習内容について背景となる学問領域と関連させて理解を深めるとともに、これまでに蓄積された小学校外国語教育の指導理論を踏まえて、具体的な授業場面を想定した授業設計及び教材を活用した模擬授業を行う方法を身に付ける。</p> <p>&lt;到達目標&gt;</p> <p>(1) 小学校外国語教育についての基本的な知識・理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校外国語教育の変遷、小学校の外国語活動・外国語、中・高等学校の外国語科の目標・内容について理解している。</li> <li>・主教材の趣旨・構成・特徴について理解している。</li> <li>・小・中・高等学校の連携と小学校の役割について理解している。</li> <li>・様々な指導環境、児童や学校の多様性への対応について、基礎的な事柄を理解している。</li> </ul> <p>(2) 子どもの第二言語習得についての知識とその活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・言語使用を通して言語を習得することを理解し、指導に生かすことができる。</li> <li>・音声によるインプットの内容の類推から理解へと進むプロセスを理解し、指導に生かすことができる。</li> <li>・児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を理解し、指導に生かすことができる。</li> <li>・コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて意味のあるやり取りを行う重要性を理解し、指導に生かすことができる。</li> <li>・受信から発信、音声から文字へと進むプロセスを理解し、指導に生かすことができる。</li> <li>・国語教育との連携等によることばの面白さや豊かさへの気づきについて理解し、指導に生かすことができる。</li> </ul> <p>(1) 指導技術</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の発話につながるよう、効果的に英語で語りかけることができる。</li> <li>・児童の英語での発話を引き出し、児童とのやり取りを進めることができる。</li> <li>・文字言語との合わせ方、読む・書く活動への導き方について理解し、指導に生かすことができる。</li> </ul> <p>(2) 授業づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・題材の選定、教材研究の仕方について理解し、適切に題材選定・教材研究ができる。</li> <li>・学習到達目標に基づいた指導計画（年間指導計画・単元計画・学習指導案、短時間学習等の授業時間の設定を含めたカリキュラム・マネジメント）について理解し、学習指導案を立案することができる。</li> <li>・ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方について理解している。</li> <li>・ICT等の効果的な活用の仕方について理解し、指導に生かすことができる。</li> <li>・学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む）について理解している。</li> </ul>
--

<p><b>授業の概要</b></p> <p>小学校学習指導要領ならびに小学校学習指導要領解説外国語編に示された「外国語活動（中学年）及び外国語科（高学年）の目標及び内容」「指導計画の作成と内容の取扱い」の読解を進める。児童役としての授業体験並びに小学校の授業映像の視聴などにより、実際の授業の様子を把握するとともに、それぞれの単元の教材や指導計画について考察・検討し、模擬授業（模擬授業）を行うことにより、実践力を身につけていく。特に、児童期の第二言語習得の特徴を踏まえ、学びのプロセスや推奨される学習方略を念頭に置きながら、実際の授業づくりに必要な指導・評価に関する基本的な知識と指導技術を身につけていく。</p>
<p><b>授業計画</b></p> <p>※毎時間、「児童役としての授業体験・英語使用」を帯活動として行う。</p> <p>第1回 オリエンテーション、小学校外国語教育の変遷、</p> <p>第2回 学習指導要領（外国語活動と外国語科の趣旨理解）中・高等学校の連携と小学校の役割</p> <p>第3回 子どもの学び方の特徴①（言語使用を通じた言語習得、類推から理解へ、音声によるインプットの在り方）</p> <p>第4回 子どもの学ばれ方の特徴②（場面にあった意味のあるやり取り、受信から発信、音声から文字へと進むプロセス、国語教育との連携等）</p> <p>第5回 主教材（中学年用）、ICT等の活用の仕方</p> <p>第6回 主教材（高学年用）、ICT等の活用の仕方</p> <p>第7回 英語での語りかけ方、児童の発話の引き出し方、児童とのやり取りの進め方（映像視聴、討議）</p> <p>第8回 文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方、ALT等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方（映像視聴、討議）</p> <p>第9回 外国語活動模擬授業設計・準備（学習到達目標、指導計画、題材の選定、教材研究）</p> <p>第10回 外国語活動模擬授業発表・振り返り</p> <p>第11回 外国語科模擬授業設計・準備（学習到達目標、指導計画、題材の選定、教材研究）</p> <p>第12回 外国語科模擬授業発表・振り返り</p> <p>第13回 絵本利用または他教科連携模擬授業設計・準備（学習到達目標、指導計画、題材の選定、教材研究）</p> <p>第14回 絵本利用または他教科連携模擬授業発表・振り返り</p> <p>第15回 学習状況の評価、児童や学校の多様性への対応、まとめ</p> <p>第16回 定期試験</p>
<p><b>テキスト</b></p> <p>・『小学校学習指導要領』 文部科学省      ・『小学校学習指導要領解説 外国語編』 文部科学省</p>
<p><b>参考書・参考資料等</b></p> <p>・3、4年生用及び5、6年生用の児童用冊子、指導書並びにデジタル教材</p>
<p><b>学生に対する評価</b></p> <p>○模擬授業等の活動状況 40%、○学習指導案の作成・提出 30%、○定期試験（筆記） 30%</p>

表6 外国語に関する専門的事項（本学では「英語Ⅰ」）シラバス案

<p><b>授業のテーマ及び到達目標</b></p> <p>&lt;テーマ&gt;</p> <p>小学校における外国語活動・外国語の授業場面を意識しながら、授業実践に必要な実践的な英語運用力と、英語に関する背景的な知識を身につけていく。</p> <p>&lt;到達目標&gt;</p> <p>(1) 授業実践に必要な英語力</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業実践に必要な聞く力を身に付けている。</li> <li>・授業実践に必要な話す力（やり取り・発表）を身に付けている。</li> <li>・授業実践に必要な読む力を身に付けている。</li> <li>・授業実践に必要な書く力を身に付けている。</li> </ul> <p>(2) 英語に関する背景的な知識</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英語に関する基本的な事柄（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）について理解している。</li> <li>・第二言語習得に関する基本的な事柄について理解している。</li> <li>・児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）について理解している。</li> <li>・異文化理解に関する事柄について理解している。(2) 英語に関する背景的な知識</li> </ul>
---

授業の概要

主に、「英語に関する背景的な知識」については講義形式、「発音練習等の帯活動」「授業実践に必要な英語力」については演習形式で行う3部構成とする。「英語に関する背景的な知識」の中では、知識ばかりに偏らない言語使用を目的とする習得のあり方を意識させ、「発音練習等の帯活動」と「授業実践に必要な英語力」においては、実際の授業場面での英語使用を想定した演習（★マイクロ・ティーチング、1～3分の教師役・児童役での活動）を行うことにより、授業実践に必要な実践的な英語運用力を高めていく。

授業計画

第1回 オリエンテーション、自分の英語力を振り返る（聞くこと・話すこと（やり取り・発表）、読むこと・書くことについて）

※第2回以降、＜英語に関する背景的な知識＞＜発音練習等の帯活動＞＜授業実践に必要な英語力＞の3部構成。

＜英語に関する背景的な知識＞ 講義、資料映像の視聴とディスカッション

第2回 音声に関する指導

第3回 発音と綴りの関係に関する基礎的な知識(1)

第4回 発音と綴りの関係に関する基礎的な知識(2)

第5回 語彙に関する基礎的な知識

第6回 文構造・文法に関する基礎的な知識(1)

第7回 文構造・文法に関する基礎的な知識(2)

第8回 文構造・文法に関する基礎的な知識(3)

第9回 第二言語習得に関する基礎的な知識(1)

第10回 第二言語習得に関する基礎的な知識(2)

第11回 異文化理解に関する基礎的な知識

第12回 児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩）に関する基礎的な知識(1)

第13回 児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩）に関する基礎的な知識(2)

第14回 正書法に関する基礎的な知識

第15回 まとめ

＜発音練習等の帯活動＞

音法、フォニックスを意識した発音練習、定型表現の教室英語、相槌などを帯活動として行う。

＜授業実践に必要な英語力＞ 導入や活動の説明やデモンストレーションなどの Teacher Talk を含む1～3分のマイクロ・ティーチングを行い、相互に評価する。

第2回 歌・チャンツの指導(1)（聞くこと・話すこと）

第3回 歌・チャンツの指導(2)（聞くこと・話すこと）★マイクロ・ティーチング

第4回 歌・チャンツの指導(3)（聞くこと・話すこと）

第5回 歌・チャンツの指導(3)（聞くこと・話すこと）★マイクロ・ティーチング

第6回 活動を体験しながらの英語のやり取り・発表(2)（聞くこと・話すこと）

第7回 活動を体験しながらの英語のやり取り・発表(3)（聞くこと・話すこと）

第8回 活動を体験しながらの英語のやり取り・発表(4)（聞くこと・話すこと）★マイクロ・ティーチング

第9回 活動を体験しながらの英語のやり取り・発表(4)（聞くこと・話すこと）

第10回 場面や目的に応じた ALT との会話（話すこと：やり取り）

第11回 自己紹介・地域紹介・文化紹介（話すこと：発表）★マイクロ・ティーチング

第12回 絵本の読み聞かせ(1)（聞くこと・話すこと・読むこと）

第13回 絵本の読み聞かせ(2)（聞くこと・話すこと・読むこと）★マイクロ・ティーチング

第14回 板書や掲示物における英語の正しい表記（書くこと）

第15回 まとめ

第16回 定期試験

テキスト 検討中

参考書・参考資料等

・『小学校学習指導要領』 文部科学省 ・『小学校学習指導要領解説 外国語編』 文部科学省 3、4年生用及び5、6年生用の児童用冊子、指導書並びにデジタル教材

学生に対する評価

○授業中の諸活動 50% ○定期試験 50% の計 100%

